



よつば会だより

2021年2月号

発行:NPO法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

2月、まだしばらくの間寒い日が続きますが、それでも庭の紅梅がちらほら咲き始めています。尾道では太陽が顔を出している風がなければ、2月でも日差しの温かさが感じられます。私が高校までを過ごした60数年前の福井県勝山市では、11月から3月にかけて一日中太陽が顔を出しているような日はほとんどありませんでした。たまに青空を見ても、1時間もすれば雪雲にとっかわられていました。冬の積雪は1.5メートルにもなり屋根の雪下ろしを三度・四度としなければならぬ冬もありました。庭の紅梅を見ながら、改めて尾道の気候の穏やかさと雪国の厳しさを思い起こしていました。でも、雪国にも春は必ずやってきました。



福山平成大学の調査研究に協力しました



1月24日の「よつば会家族教室」は、福山大学看護学部の「精神障害者が地域生活を継続するための促進要因の実態」についての調査研究への協力として、大学の研究者からのグループインタビューを受けました。家族教室への参加者は11名でした。研究者からの質問は、研究テーマにかかわっての4項目ほどあったと思うのですが、メモを取らなかったため、改めて思い出そうとしても後期高齢者の脳からは、残念ながら何も浮かんできませんでした。記憶にあるのは、参加者の皆さんが活発に発言されていたことぐらいでした。大学の研究テーマ「精神障害者が地域生活を継続するための促進要因の実態」は、着眼としては面白く、精神障害者やその家族が気づいていない地域定着への要因が見出されることに期待を持ちます。調査研究の結果がまとまるまでには、かなりの時間を要すると思われるかもしれませんが、楽しみに待つことにします。

この日は、尾道市の広報を見て初めて家族教室に参加された方が1名おられました。娘さんのことで相談したいというお母さんだったのですが、グループインタビューに時間をとる必要があり、娘さんの状況を話してもらっただけで終わってしまいました。せっかく参加されたのにと申し訳なく思っています。このお母さんには日を改めてお話を伺うことにしています。(N.T)



「サロンよつば」にお越しく下さい



新型コロナウイルスへの感染が高止まりで続いています。政府は11都府県に緊急事態宣言を発するなど、沈静化に大わらわですが、目立った効果も見えてきません。こうなると、新型コロナウイルスのワクチンへの期待が大きくなりますが、国民の多くにワクチンが行き渡るのは、当分先になるようです。こうした状況から万が一を考えて、2月の「家族の SST」と、3月の「よつば会家族教室」を中止することにします。昼食会も中止です。「サロンよつば」は、これまで通り毎週水曜日、土曜日の午前中に開きます。「サロンよつば」は、当事者の憩いの場になっています。コロナ騒動で、外出もなるべく控えることが求められている中で、せめて「サロンよつば」ぐらいは開いて、当事者たちのおしゃべりを楽しむ時間を作ろうという思いからです。これまで昼食会には参加していた当事者も何人かいましたが、水・土曜日のサロンに、気が向いたら顔を出してみてください。「よつば会家族教室」や「家族の SST」も家族の方のおしゃべり、息抜きの場になっていたかと思います。それを当分中止にするのですが、家族の方で何か相談したいことがあったり、また、気分転換を図りたいようなときには、サロンに来てみてください。相談は他の人がいないほうがしやすいこともあるでしょう。そういう時は、谷口の携帯電話番号(080-6341-6317)に連絡を入れていただければ、谷口がお会いして話を聞かせてもらう場を設定することを、今後やっていこうと考えています。

1月の活動報告

24日 よつば会家族教室 (センターむかしま)

2月の活動予定

* 例年開催の「当事者との交流会」

及び「家族の SST」は中止とします





親は“その時”を信じて待ちましょう ～当事者は自分の自立と親を思い動き出します～



「みんなねっと」誌1月号の「みんなねっと相談室から」の記事に、当事者から寄せられた「母に文句を言い暴力を振るってきたが、母が頼りだった。母がいないと何もできないことが分かった。親が病気になり、これからは親孝行したいが、自分の精神症状のため思うように世話ができなくて毎日が苦しい」という相談が取り上げられていました。記事では相談者についての説明はなく、相談の内容も短くポイントだけに絞っていると考えられ、相談内容の文章から想像するしかないのですが、文章を読んで色々な思いが頭に浮かんできました。

まず、相談者は多分かなり長い間「母に文句を言い暴力を振るってきた」と推測します。精神の病気になった初めのころは、病状からくるしんどさや先行きの不安を抱え、それを周囲の人が分ってくれないといういら立ちもあって、誰かに当たらずにはいられないような気持ちになったりします。親と一緒に家で生活している当事者の場合、当たる相手としてはまず母親でしょう。母親は誰よりも懸命になって子の世話をします。それだけに子に対して言葉をかけることも多くなります。かける言葉が多くなれば、子の気持ちをいらだたせる言葉を出してしまうこともあります。病気も手伝って言葉や気持ちに敏感になっている子は、すかさず声を大きくしていくことにもなるでしょう。母親にとっては苦しいことですが、こうした状況はかなりの期間変わらずに続くことになるようです。よつば会家族教室でも、子は相変わらず身勝手だという親の話をよく聞きました。

しかし、子の荒れた状況も、生活環境が変化することで変わってくるのがよくあります。この相談者の場合、生活環境の変化は母親が病気になったことでしょう。それまでは、文句を言おうが、暴力をふるおうが、それでも面倒を見てくれる母親に頼っていることでしたのだが、母親が病気になったことでそうもいけなくなり、気持ちを切り替えて、これからは親孝行をしようと考えたのでしょう。または、母親が病気になる前から、内心ではこのままの状態ではいけない、何とか変えていかないといけないと考えるようになっていたのだが、そのきっかけが見出せなかったのかもしれない。

いずれにしても、相談者は母親の世話を自分がしないとイケないのだという気持ちになっています。そのことが母親に伝わっているかどうかは文章からでは分からないのですが、母親がそれを知ったら大喜びでしょう。自分に向かって文句を言い暴力を振るってきた子に、親孝行をしたいという気持ちがあるとは、思ってもみなかったことでしょう。しかし、親から見れば、子が何を考えているのか全く分からないと思っても、子は内心ではいろいろと考えていると思います。多くの当事者が、親に頼るばかりでは、親がいなくなったとき自分は生活していけなくなるかもしれない、今のうちに自立して生活ができるように準備しなければという思いを持っていると感じます。しかし、親にはそのような思いがあるとは、なかなか言わないでしょう。

そろそろ結論に入ります。親に文句を言い暴力を振るってきた相談者が、親孝行の気持ちを持っているという文章を読んで、多くの当事者が内心では同様の気持ちを持っているのではないかと思いました。よつば会につながっている当事者の中にも、親孝行につながる親のことを考える行動を見ていたからです。しかし、そうした行動に至るまでには長い期間が必要でした。その期間の中では親子の衝突もたびたびありました。それでも当事者には、内心親に迷惑をかけてばかりではいけないという気持ちがあるのだと感じました。ですから、当事者を抱えた親の方に言いたいのですが、「今は子の状況に不安やしんどさを抱えていても、やがては、その子が親のことを、そして、自分の自立のことを考えるようになる時が来ると信じて待ってください」